学生のポスター発表

第６回教育デザインフォーラム　学生発表会の報告

教育学研究科
（教育デザイン検討委員）
重　松　克　也

１　本学生発表会の目的

本学大学院教育学研究科では新たな理念に基づいて教育デザイン科目（「コア科目」と「教育インターン科目」が開講された。院生達が自身の研究の意義を教育とのつながりの中でとらえることをカリキュラムとして大きく位置づけたのである。院生自身の研究内容とその所属専門領域における教育学とのつながりに留まらず、教育学全体・トータルな教育の場そのものへの視野をもつことも目指されてこよう。教育デザイン検討委員会では議論を重ね、そうした問題意識を練り上げ、本発表会のねらいを「コア科目」における現時点での成果および「インターン科目」とのつながりを交流し合うことに設定した。

２　発表形式

本学大学院教育学研究科における 16 専門領域（専修）から 1 グループ（個人、団体を問わず）がポスターセッション形式で行われた（模造紙 1 枚程度のポスターに研究内容の概略を示し、補助資料等も発表内容によっては活用した）。

発表内容がそれぞれの専門領域に関わりなおかつ発表者が修士1年生であるために、一定の意見交流がひいては研究交流が成り立ちにくいと予想された。そこで今回、ポスターセッション形式を導入し、発表者と聴者との柔軟で闊達な対話を保障することとした。発表者自身にも他の研究との交流を確保すべく、発表の時間帯を２つに（各 45 分間）、また会場を4つに分けた。

３　発表者と発表テーマ

A 会場

＜前半＞

・平本千啓（教育デザインコース／保健体育）
　「児童の疾走動作の特徴およびその変容の観察」
・大野仁寛（教育デザインコース／英語）
　「日本人学習者の英語学習における語用論的意識の調査」

＜後半＞

・植松夕佳（特別支援・臨床心理コース／臨床心理学）
　「児童期の対人関係の移り変わりについて」
・椎野由希子（教育デザインコース／美術）
　「生涯にわたる美術鑑賞を子ども時代から育てる意義」

B 会場

＜前半＞

・高井英俊（教育デザインコース／理科）
　「理科教育における自己調整学習の構想」
・谷　竜太（教育デザインコース／数学）
　「算数科授業における効果的なグループ学習の取り入れ方」

＜後半＞

・シュムコー，コリーン（教育デザインコース／音楽）
　「日本の伝統音楽の教習法」
・館野裕美（教育デザインコース／家政）
　「家庭科教育に関する中学生の実態と意識 ― 食生活と衣生活を中心に ― 」

C 会場

＜前半＞

・須田孝之（教育デザインコース／技術）

「高等学校における教材用ロボットの研究・開発」

・坂利明（教育デザインコース／心理学）

「練習船における船員養成のための教育環境デザイン」

＜後半＞

・山村亮仁（教育デザインコース／国語）

「大学入試国語に関する言説研究ー戦後大学入試『現代文』を観点としてー」

・飯室智恵美（教育デザインコース／日本語教育）

「日本語を母語としない児童への学習支援について」

D 会場

＜前半＞

・藤本武（特別支援・臨床心理コース／特別支援教育）

「特別支援学校における『特色ある新しい学校経営』」

・佐藤由紀（教育デザインコース／臨床教育）

「『指導と評価の一体化』を図る校内授業研究に関する実践的研究」

＜後半＞

・社会（1）代表者　宮川史義（教育デザインコース／社会）

「授業づくりにおける教科内容研究と授業分析の有機的な関連に関する実践 ― 附属学校との学的連携を基軸として ― 」

・社会（2）金月「倫理教育における授業分析と教材開発プロセス」

・増田妙子（教育デザインコース／教育学）

「学校運営協議会とその運用実態について ― 横浜市に焦点をあてて ― 」

4　当日の様子

参加者は学校現場の先生方等の参加もあって約 200 名となり，またそれぞれの発表について質問や意見交流がなされている光景が随所にみられる盛況さであった。

・「発表者自身はこのような状況が生じる根本的な原因は何だと考えるのか」：学問的な視野からだけではなく、現実の問題の諸相を更に把握することで、問題関心のシャープが出るのではないかという質問。

・「主体的な学習を主張されるが、戦前戦後を見通して、『全体的』の意味するところの歴史的な変遷をふまえて定義する必要があるのではないか」：他教科、教育学全体を俯瞰する必要性についての指摘。

・「なぜ、学習成果がこのような検証で実証されたとされるのか」：学術的な相違についての質問。

あちらこちらで上記のような会話が、しかも質問→回答で終わる単発なやり取りではなく、発表者と参加者それぞれがお互いの意図を示しながらの会話が多く見受けられた。学校関係者から、具体的な視点での質疑も出され、ある報告者は今後の研究の方向性に大きな示唆を頂いたと後日、筆者に述べていた。これらは本発表にとって大きな成果だといえよう。

5　今後の課題

まず、発表者の対象についてである。本年度は新構想大学院が発足した理由から修士1年としたが、入学後半年間の研究成果となった。コア科目とインターン科目との連動を重視するならば、来年度は修士2年生が妥当ではないだろうか。

また、聴者となった院生がどれほど自身の研究の方向性の再検討として発表を引きつけることができたのかについても長期的な視野での検討が必要となろう。更には今後とも学校現場関係の方々の多くの参加を得ていくことも、コア科目・インターン科目、何よりも新教育学研究科における研鑽の臨床的な向上につながってこよう。